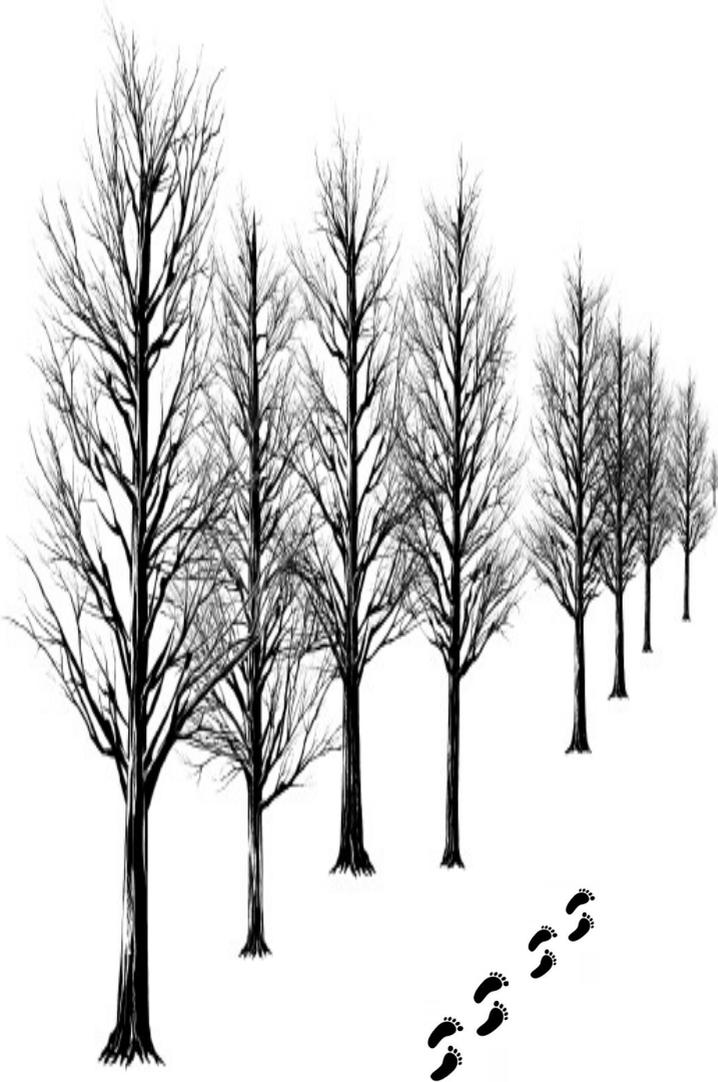


# 乾文學

平成二十九年十二月号



## 序文

鈴木 啓介

六月某日、塾事務所からの一通の通達が、乾寮を震撼させた。その通達は、乾寮解体の旨を伝えるものだった。

二〇〇九年に乾寮ができて以来、乾寮は各寮とはある種一線を画しながら、「伝統」と呼ばれた様々な制度を批判し、特異な文化を形成してきた。そうした乾寮の文化の中でも、最大の特徴とは、僕は、何でも受け入れてくれる寛容さにあると思う。例えばこの乾文學では、創刊の辞にあるように、自由な雰囲気から誰もが自由に発言できるといふ乾寮らしさ。寛容性が全面に表れたものとなっている。だが、この自由さは、乾寮内で良いようにばかり働いているとは必ずしも言えないように思う。各種行事の参加率や総会の出席率は、他

寮に比べかなり低いものであることは明らかであり、何をやるにしても人が集まるかの不安は、悲しいことに毎回付きまとう。では、何が他寮の学生のそうした行事への積極的参加をさせているのだろうか。僕は、よく言われるような、単なる強制力だとは思はない。それは自分の寮に対する愛寮意識、あるいは帰属意識からくるものだと思う。各寮の体育祭に臨む態度や姿勢からもそれは窺えた。そして、乾寮の学生はそうした帰属意識や寮への愛は、希薄なものであると、この一連の乾消滅に関する話し合いをするまでは思っていた。

乾寮の取り壊しが、僕らの意見を全く取り入れないまま塾事務所での会議で勝手に決められて、その通達が届いた時、僕らは怒り、誰もが塾事務所側との会議の場を望んだ。普段は総会で半分も人が集まらないのに、この時だけはみんなが集まった。僕はそこで、乾寮生の乾寮に対する帰属意識を初めて感じた。嬉しいのか情けないのかよくわからない感情だっ

た。でも、乾寮生に乾寮生の意識があることは確認された。和敬塾においては、自分がどの寮に所属しているのかというのは、やはり、非常に大きな問題なのである。

和敬塾の六寮はそれぞれがそれぞれの考え方を持ち、異なるカラーを強く打ち出している。なればこそ、乾文學は乾寮だけのものではなく、全寮のものになってほしい。自分たちの考え方を、ここでぶつけて欲しい。本文でも書いたが、和敬塾の良さは入ってみないとわからないことが多い。実際、その良さが、乾文學に投稿することでどの程度伝わるかは分からない。でも、多くの和敬生が携わり、この文集を手にとることで、自らの文化を相対的に捉え、より良いものにしていくことはできるはずだ。

和敬塾は現在、学生数の減少というかつてない問題を抱えている。今回の合併問題も、根本的な原因はここにあり、逆に言えば、学生数が増加すればこうした問題は発生しなかつ

た。この問題を根本的に解決するためには、和敬塾をより魅力的な寮にしていくための議論が必要だ。今回合併に無関係となった寮も、今回の合併を他人事と捉えず、和敬塾の問題として考えて欲しい。乾文學はそうした議論を行う場、意見を投げる場として、誰にでも開かれている。

みんな和敬塾が好きだろ？  
だったらみんなで考えようぜ。

# 目次

一項 序文

六項 論考 和敬塾への提言

十四項 隨筆 和敬死すとも「乾文學」は死せず

二十二項 対談 寮生のホンネ

三十一項 隨筆 乾寮がなくなることの利点

## 特集 変革への足音

三十四項 乾寮の良さ

三十九項 転句

四十三項 論考 シカクいアタマをマルくする

五十項 論考 機械学習の可能性と限界

五十二項 寄稿者一覧・編集後記

論考 和敬塾への提言

伊藤 圭基(乾寮第七期)

大学に通い始めて、三年半が経つ。この間、大学とはどういう場所なのか、この時期に何を学ぶべきなのか、自分なりに色々と模索してきたつもりである。今後の和敬塾を考えるにあたって、やはり大学のあり方や大

学生の間につきことを軸に考えるべきであると思うので、僕なりの現在の大学像についてまとめたい。今後の和敬塾についての意見を述べていきたいと思う。ただし、ここでいう「大学」とは総合大学のことを指し、短期大学や専門学校のような教育機関は含めないこととする。

現在の大学像を考えるための出発点として、大学を構成する人々について考えたい。大学を構成する人々は、

大きく学生と教員に分けられる。(事務員やその他の職も沢山あるだろうが、それは大学の本質ではないとして、ここでは考えないこととする。)

学生と教員という構図だけみると、一見、初等・中等教育機関と同じようである。確かに、大学が教育機関であることは間違いないさそうである。だが、大学も初等・中等教育機関の延長線上にあるのかというと、どうやらそういうわけではないようである。

その理由は二つある。

一つ目は、大学は初等・中等教育機関とは違って、学生が次に進学する教育機関がないことである。多くの学生は、大学で最後の教育を受けた後、何かしらの職

業に就き、働くことになる。大学院に進学する人も多くいるが、これは大学に残ると解釈できるので、別の教育機関に進学するわけではない。

初等・中等教育機関の場合、次に待つのはより高次の教育機関である。そのため学生は、各段階での勉学の理解が求められると同時に、より高次の学問体系が理解できるように準備することが求められるだろう。(中には大学に行かず就職をする人もいるだろうが、和敬塾生は皆大学生であるから、ここでは大学に進学する学生だけを対象に考えることとする。)

一方大学の場合は、次に待つものは就職であるから、学生は大学での勉学の理解が求められると同時に就職への準備をすることが求められるはずである。

一つ目は、大学では学生教育以外の営みとして、諸分野の研究がおこなわれていることである。

初等・中等学校の目的は、学生を教育することであつ

て、それとは別の目的が存在しているわけではない。

しかし大学は、学生を教育することとは別に、各分野の専門家が集まり、その分野をより詳しく知ろうとする営みもおこなわれている。そして面白いことに、大学の教員は、そういった各分野の研究をしている専門家であり、教員免許等は必要とされていない。つまり、大学の教員は、初等・中等教育機関の教員とは異なり、学生に指導することに長けている人でもなければ、必ずしもそれが求められている人でもわけではないのである。

このように、初等・中等教育機関と大学の違いを見てみると、一つのジレンマが生じていることがわかる。それは、先ほど述べたように大学生がやるべきこととして、就職するための準備が挙げられるはずなのに、大学の教員は就職に関する知識を持つことを前提とされていないというジレンマである。

ではきつと、各分野の詳しい知識を教えることが、直接的に就職につながるに違いないと思うかもしれない。確かに、学生が専門家を目指す場合や資格が必要な職業を目指す場合は、その分野の詳しい知識を教えることが就職に直結するだろう。しかし、そのような学生は大多数とは言えないのではないだろうか。

これを考えると、大学は、必ずしも大学生が大学生としてすべきことを提供する機関ではないことがわかってくる。むしろ大学は、ただの専門的な知識を蓄積していく貯蔵庫に近いのである。これを考えると、大学生がすべきことは、大学の中から有用な知識を自ら引っ張り出し、自分の将来の道に役立てていくことであると言えるのではないだろうか。

このような理解は、様々な疑問の解決に役立つだろう。例えば、大学には学生にとって面白くなかったり、聞

く意味を感じなかったりする授業があるのはなぜなのだろうか。これは大学の性質上、仕方のないこととも言える。なぜなら、大学の教員は学生に教える能力を持つことを前提としておらず、大学側から自ら学生に有用な知識を教授するための構図を持っていないからである。

就活についても同様である。多くの大学では、就活は自主的に行わねばならず、大学側の支援があるわけではない。これも大学の性質上仕方のないことと言える。なぜなら、大学ができることは各分野の専門知識を提供することであって、それを就職に生かすことを考えるのは学生自身だからである。 ※注1

大学がこのような場所であるからこそ、多くの学生はサークルやインターンやボランティア活動といった大学の運営とは直接関係のない活動に参加して自分の興味を模索するのであるし、多くの企業は就活サイトや

就活サポートという形のビジネスを盛んに行い、大学の就活を支援しようとしているにちがいない。

ではこのような大学のあり方を踏まえた上で、和敬塾はどのような場所であるべきなのであろうか。

先に述べたように、現在の大学は就職というものを手助けすることを目的としている機関ではない。だからこそ、学生は必然的に大学が提供するもの以外で就職において優位になるような援助を求めるはずである。

特に昨今は、守られた環境で育つ子供が多い。身の回りの危険なものほとんどと取り除かれ、大学生になるまで主だった不安を抱えることなく生きてきた人が多いのではないか。そのような環境で育ってきた子供達にとって、大学に入って急に何のサポートもなく就職という人生の大きな決断を一人で決めるといふこと

は、楽なことであるはずがないだろう。

また、親にとつても同じことが言えるはずである。昨今は過保護な親が増えていると言われている。大学に入るまで、何不自由のないように大切に育ててきた子供を、大学に入った途端放り投げることはなかなか難しいのではないだろうか。大切な子であればこそ、せめて就職するまではしっかりとサポートしてあげたいと思うのではないだろうか。

僕がここで言いたいのは、大学が今の形態であり続ける限り、就職に有益になるようなことを提供する機関に需要が集まることは必然だろうということである。大学生もその親も、皆就職に対して漠然とした不安は持っているはずであるが、その不安を大学は振り払ってはくれない。だからこそ、寮という立場からそう言った就職に関するサポートできれば、多くの学生やその親御さんにとって需要が高まるにちがいないと僕は

思うのである。

とはいうものの、現在の和敬塾はそう言った取り組みをしようとしている団体ではない。

現在の和敬塾で学生が力を入れているイベントといえば、体育祭や劇といった、むしろ大学生活を楽しむという方向性のイベントである。確かに定期的に、大手企業の重役等を招いての講演会等も開催しているのだが、これは大学の授業と同じように、学生側が自ら学びに行つてそこから必要なものを抽出して活かすということとをせねばならないため、本質的にやっていることは大学と同じなのである。これでは、現在の多くの学生やその親御さんが求めているものを満たすことはできないだろう。

和敬塾を改革するためには、もっと別の方向性が必要不可欠なのではないだろうか。

大学との差別化を図りつつ、和敬塾で実現可能な範囲で、寮生の就職にとつて優位になるようなサポートはどのようなものが考えられるだろうか。これを考えた時、僕はとある就活イベントで聞いた、DeNAの創業者である南場陽子さんのお話を思い出した。

南場さんはその講演で「これからの時代は企業が企業の中だけで完結して業務が終わる時代ではなく、企業が集まってプロジェクト単位で仕事を進める時代が来る」とおっしゃっていた。その根拠は明確には述べていなかったが、確かに仕事をより効率的にやろうとすると、自社の中で全てを賄おうとするよりも、各分野の得意な人や企業を集めて仕事をした方がよいことは、現場を知らなくても容易に想像できそうである。

ではこの考え方を、和敬塾の中で使ってみてはどうだ

ろうか。

寮事務が抜本的な塾改革をするにあたって人材的にも財政的にも不足しているのは明らかである。そうであれば、塾側は職員の中だけで閉じた改革を目指すのではなく、改革の一つ一つをプロジェクト化し、そのプロジェクトごとに寮生を集め、その寮生にプロジェクトを任せてみてはどうだろう。

塾側は、プロジェクトを考え、声高らかに寮生にそれを通知し、それに賛同する人物を学生の中から集め、あとはプロジェクトの進捗確認などをすればよい。ただその際、気をつけるべきことが2つあると考えられる。一つは学生にとって成長できるプロジェクトを考えることと、もう一つは学生の主体性を重視することである。

具体例を出してみよう。

例えば、和敬塾の広報はプロジェクト化することがで

きると僕は思う。webについて知識のある人、デザインに興味のある人、とにかく和敬塾の良さを対外的に伝えたい人、そのような様々な人を集め、目標を決めさせ、各自話し合いをさせつつ好き勝手にプロジェクトを進めさせるのである。このプロジェクトを進行させることによって、多様な人と関わることができたり、web等についての専門知識を得ることができたり、自分のアイデアを形にして社会の反応を見するという経験を得ることなどができるため、学生の成長につながると思われる。また、塾側の制約を加えず、学生独自の発想と行動力を頼りに自由にプロジェクトを進行させれば、プロジェクト成功のために学生は多くの労力を尽くしてくれるのではないだろうか。

和敬塾の広報以外にも、様々なプロジェクトが考えられる。体育祭の企画、塾祭の企画、ボランティア活動、地域の皆様との交流などである。このように、プロジ

エクトを様々な組んで学生にやらせていけば、必然的に和敬塾は大きく変わっていくことができるだろう。

また、このような取り組みは先進的であるため、成功すれば面白い試みをしている寮だとしてメディアにも多く取り上げてもらえる可能性は大いにあると考える。

読者の皆様の中には、このような取り組みはうまく行くはずがないと思う人もいるかもしれない。確かに、どれほどの寮生がプロジェクトに集まるのかはわからないし、学生だけにプロジェクトを任せて大丈夫なのかという不安もあるだろう。

しかし僕が大切だと思うのは、プロジェクトが成功するかどうかというよりも、和敬塾でこのような活動が行なわれていることを知った人にとって、それが魅力的に感じるかどうかということである。

前半で述べたように、大学生やその親は、漠然とした就職への不安を抱えているはずである。それを補完す

る形で動いてくれる寮は必然的に需要が高まると思われる。

様々なプロジェクトを学生に任せて自由にやらせるという試みは、現在の大学ではなかなかできないことであり、かつ、学生主体でやるものであるから、他の大學生とは異なる知識や経験を得ることができる。これは就職の際にかなり有利になることではないだろうか。また、今後プロジェクト単位で仕事が進む社会に変化していくことを考えると、何かのプロジェクトを任されて成功させたという経験があることは、企業側にとっても大きいことだと僕は思う。

ただし、このような活動を始めるために必要なのは、塾側がしっかりとしたりーダーシップのもと、はっきりとした指針を打ち出すことだと僕は思う。いくら一学生があるプロジェクトをやらうと言いついても、なかなか他の多くの学生を動かすことはできないのであ

る。それは、これまで和敬塾で、周りから新歓行事が悪習慣だと言われていても、塾側の実効的な介入がなければ変わっていかなかったことを見ればすぐわかるだろう。

トップがどのような指針を決め、どのような理想的な組織を思い描き、どのようにしてその理想に近づけようとするのか。それこそが、現在の和敬塾に求められていることだと僕は思う。この文章では今後の和敬塾を形作っていくにあたって、最も良いと僕が考えた方法を提示したまでである。最後は、塾側の手腕にかかっていると僕は思う。

乾

※注1

これだけ多くの人が大学に通い、卒業していくわけであるから、先に述べたような大学の立場は社会全体にとって不利益だという考え方もあると言える。近年では、大学側ももっと学生に語りかけていこうという試みも見られるようであるし、実際に大学側が就職支援を行っている大学もあるようである。上記で述べたことは、現在の大学の構造から素直に帰結される大学のあり方だと理解してほしい。

隨筆  
和敬死すとも「乾文學」は死なず

伊勢 康平（乾寮第六期）

「失礼ですが、信じられませんね」とヴォランダが答えた。

「そんなはずはない。原稿は燃えないものなのです」

ブルガーコフ『巨匠とマルガリータ』

かつて「字、乳也」といった人がいる。

一見なにかの間違いではないかと疑ってしまふこの定義は、決して暗号やことば遊びの類ではなく、いたってまじめな書物に書かれている。そのうえ、こうして「字」という字を定義した人物は、おそらくこの文章を読んでいるあらゆる人よりも漢字に精通していた。というのも、この定義は後漢の許慎による中国最古の字書（つまり世界最古の漢字辞典）である『説文解字』の「字」の項の引用だからだ（※1）。

近く行われる和敬塾の組織の統廃合によって乾寮が取り潰しの危機に瀕しており、怒り心頭の後輩たちが「乾文學」で批判特集を組むらしいという話を耳にしたとき、いささか不謹慎ながら（？）、ぼくは「説文」の「字、乳也」を想起していた。なぜなら、和敬塾や乾寮と「乾文學」、それからぼくたちの関係は、「字、乳也」

の一節およびそれをめぐる簡単な思考で端的に整理できるからだ。

どういうことか。まず「字、乳也」から明らかにしておくと、これは「字」という漢字が子を<sup>ま</sup>生むという意味である／あつたことを表している（屋根の下で子を育てるといふことだという）（※2）。そこから、単独の記号で意味を表す象形文字を「文」と呼び、意味を表す部分（意符）と発音を表す部分（音符）の複数の記号の組み合わせでなる形声文字を「字」と呼ぶようになった。というのも、現在漢字のおよそ八割がこの形声文字Ⅱ「字」であり、複数の記号の組み合わせで次々と生まれていく形声文字Ⅱ「字」が、まるで子どもがぼこぼこ生まれるように増えていったからだともいわれている。したがって、「字、乳也」は「字は、乳むなり」と訓読されなければならない。

とはいえ、現代を生きるぼくたちにとって「乳」はだ

れが何といおうととち、ちである。それゆえ「説文」の「字、乳也」は限りなく「字は、乳なり」と誤読される可能性にさらされているといつてよい。「字、乳也」と書かれたとき、それが生むことなのかちちなのかを排他的に決定することは不可能であり、それは原理的には（声に出して）読まれた瞬間に決定される。それはとりもなおさず、ぼくたちがなにかを書くとき、それがだれのもとへ届き、どのように／どのようなものとして読まれるかを書き手自身が制御できない（※3）ということを意味している。換言すれば、テキストは書かれ、放たれた瞬間から主体⇨書き手のもとを離れ、主体の意思や生死（！）とは関係なくあちこちを飛び交い、絶えず誤読を引き起こしてゆくということだ。（その意味で、たとえば「字、乳也」がなんの文脈も註釈もなく切り取られ、「クソワロタ www」などという寸言とともに Twitter に投稿されてしまうことをだれも

止めることはできない——むろん、そうした投稿には多くの「専門家」による批判が寄せられることだろう）ぼくの解釈が間違っていないければ、この書くことの多重性やそれゆえの危うさを「エクリチュール（書かれたもの）」と呼び、いま・ここにおいて生起することで多重性を消去する「パロール（声）」と区別したのがフランスの思想家ジャック・デリダだった（※4）。

整理しよう。最古の漢字辞典には「字、乳也」と書かれている。いまを生きるぼくたちにとって、その一節それ自体の意味は、声に出して読まれる瞬間まで絶えず生むとち、ち（あるいはもっと多くの意味）の間で揺れ続けることになる。書き手はその振幅や射程を制御することはできない。なぜなら、エクリチュールは放たれた瞬間から書き手のもとを離れ、その意識や生死に関係なく漂い続けることとなるからだ。つまり、文章が残ることと誤読されることはつねに表裏一体なの

だ。

さて、これまで「乾文學」を読んでくださった方は「ご存知のように、ぼくたちは「乾文學」という試みをしばしば「公園」ということばで表現してきた。初代編集人の那須優一は「乾文學」を文芸誌「プロ野球の球場」と対置しつつ「誰もがいつでも気軽に」やって来て、そこから「いつかプロが現れるかもしれない」が、そうでなくても「思いつきの場所」となるような空間にしたいといった（「創刊の辞」）。そしてぼくはそうした気軽さの中に、突然知らない人のもとへボールが届き、拾われるような「唐突さと偶然性」を秘めた空間を目標した（「和敬塾再定義のために」。また同じく「和敬塾の再定義」所収の「和敬小劇場」の註二にある通り、「和敬塾の再定義」で提案した「小劇場設立計画」で暗に目指されていたのは「例えば『早稲田 演劇』と検索する

ことで和敬小劇場、あるいは和敬塾本体のHPに辿り着くといった現象であり、そうした偶然によって本来和敬塾を全く知らない——従って絶対に『和敬塾』というワードでは検索しない——人々に和敬塾のことを知ってもらえるようになるということだ」った）。

そして、こうした「公園」の類似にもう一つだけ付け加えるなら、「公園」とは往々にしてあとになって、遡行的に見出されるものである。「乾文學」に関わった人たちが思い返すだけではない。それは同時に、「公園」から生まれたプロをたどって見出される（あえて野球の例を続けるなら、石川県能美市の名もなき公園や、愛知県名古屋市のとあるバッティングセンターは、松井秀喜やイチローがかつて練習をした場所として今後も見出され続けることになるだろう）ものであり、あるいはたまたまなにかの拍子でだれかが訪れることになって「再発見」されてしまうかもしれない。もちろんど

ちらも稀な話ではあるが、ぼくは乾寮が消滅の危機を迎えているいま、「乾文學」が持ちうる可能性はここにしかないと思っている。つまり、たとえ乾寮がなくなっても「乾文學」は残る。それは「乾文學」に寄稿し／手に取った人々の本棚であったり、広大なサイバースペースであったり様々であるが、いずれにせよ「乾文學」のテキストが残り、漂い続ける限り「乾文學」や乾寮は単に当事者たちの思い出に留まらない、遡行される「公園」として見出される可能性を僅かながら持ち続けることになる。

乾寮だけではない。そもそも今回の統廃合が実施される背景に和敬塾自体の経営難があることはだれの目にも明らかである。今回の統廃合ですべてが円満に解決するとは考えられないし、おそらく乾寮なきあとも和敬塾は解決できない諸問題を抱え込んだまま厄介な撤退戦を続けることになるのだろう。乾寮がなく

なっても「乾文學」は残るように、和敬塾がなくなっても「乾文學」は残る。和敬塾自体はそうすぐにはなくならないかもしれない。でも、「乾文學」は間違いなく和敬塾よりも長く生きる。そして、さきほど強調したように、エクリチュールは残ると同時に、いやそれゆえに誤読の可能性にさらされ続けるものである。和敬塾は、乾寮は、そして「乾文學」はこれからもぼくたちの「思い出の場所」として記憶に残り続けるだろう。だけど、それとはまったく別の文脈で、ぼくは和敬塾なきあと「乾文學」が遡行的に発見、誤読されることよって日夜「酒・筋トレ・合コン」を希求した和敬塾、そのものが誤読されてしまふような、そんな可能性について考えている。

もしかすると、ぼくがこのように書くことで失望する人がいるかもしれないし、無責任だと憤慨する人も

いるかもしれない。たしかに今回の統廃合そのものや、乾寮の取り潰しを計画しながら新人生を募集した事務所の行動はたいへん腹立たしいし、後輩たちのことを思うとじつに心が痛む。だからぼくはここで和敬塾事務所を手厳しく批判し、いまこそ立ち上がらなければならぬと檄文よろしく書かねばならないのかもしれないし、かつてのぼくならあるいはそうしたかもしれない。

ただぼくは変わってしまった。この文章を書くにあたって、ぼくが編集人をしていたころの「乾文學」をずいぶん久しぶりに読み返したのだが、いまのぼくには、もはや三月特別號や「和敬塾の再定義」の序文に見られたような情熱はない（当時はいたって冷静に書いていたつもりだったが、いま見るとわれながら余りに情熱的だったので驚いた）。あのころは序文や鼎談、提案の内容と同様に、いやそれ以上に、「乾文學」をつく

るという行為そのものが和敬塾を大きく変えるに違いないと素朴に信じていた。しかし、結局「左右の思想対立を超えて」も「和敬塾の再定義」（なかんずく「小劇場設立計画」）もほかの寮ではほとんど無視されたし、せいぜい事務所の方々に「よく頑張っているね」とほめられたくらいだった（それ自体は喜ばしいことだ）。いまのぼくにはがっかりする人がいる（かもしれない）ように、ぼくもまた和敬塾にがっかりしている。ただそれだけのことだ。

この文章のタイトルは「和敬死すとも『乾文學』は死なず」となっている。その意味するところはすでに述べた通りエクリチュールが主体Ⅱ書き手を超えて時空を移動すること、それゆえぼくたち書き手や和敬塾、乾寮といった組織の有無にかかわらず人々に読まれる可能性を秘めているということである（つまり「乾寮

なくなつた、和敬死ね！」という意味では断じてない——為念)。また、それに伴つて「乾文學」は不可避免的に誤読されるだろう。それは内容のみならずその行為もまた同様である。「乾文學」は「和敬塾の伝統」という大きな物語に包摂されない塾生間のゆるやかなつながりを目指して創刊された。つまり「乾文學」の内容以前に、和敬塾で文芸誌をつくるという行為そのものに大きな価値や意図が含まれていたわけだ。ぼくたちにとってそこはいつまでも変わらない。だけど、ぼくは、やがて何らかの形で「乾文學」を見つけてしまった人が「乾文學」のエクリチュールだけでなく、和敬塾そのものが「文學する公園」であつたかのような、そうした誤読を引き起こしてはくれないかと夢想する。そうなつてはじめて、乾寮(生)や刊行されなくなつた「乾文學」も浮かべられるというものだ。

いまはただ、それで満足するよりほかないのかも

れない。いずれにせよ、種はまかれたのだ。

乾

〔1〕中華書局版、二〇一三年、三一頁下

〔2〕『王力古漢語字典』(中華書局、二〇〇〇年)八頁「乳」の項および二二三頁「字」の項には、共に「生子」という定義が記されている。

〔3〕ソクラテス(≡プラトン)はこういつている。「言葉というものは、ひとたび書きものにされると、どんな言葉でも、それを理解する人々のところであろうと、ぜんぜん不適當な人々のところであろうとおかまいなしに、転々とめぐり歩く。そしてぜひ話しかけなければならぬ人々にだけ話しかけ、そうでない人々には黙っているということができない。あやまって取りあつかわれたり、不当にのしられたりしたときには、

いつでも、父親である書いた本人のたすけを必要とする。『パイドロス』藤沢令夫訳、岩波書店、一九六七年、一三六頁）では、「父親である書いた本人」がすでに死んでしまっている場合、だれがエクリチュールを助けるのだろうか？

「4」ジャック・デリダ、藤本一勇訳「署名 出来事 コンテキスト」(同著、訳『哲学の余白 下』法政大学出版会、2008年、p227~268所収)など。なお、このエ

クリチュールとパロールの性質に注目するところから（いやむしろエクリチュールとパロールは本質的に区別できないという事実から）デリダの有名な脱構築と呼ばれる複雑な戦略が始まるのだが、それそのものに言及することは本稿の問題を超えている。ここではさしあたり高橋哲哉『デリダ 脱構築と正義』（講談社、二〇一五年）東浩紀『存在論的、郵便的』（新潮社、一九九八年）などの書物を紹介するに留めておく。

鈴木 啓介＋西村 康成（乾寮第八期）

筆 鈴木啓介

今回の合併通告は何がいけなかったのか

鈴木 今回の乾寮消滅事件に関して、僕がこの事件を

通して思ったのが、和敬塾って本当に住んでみないとわからない良さだったりとか、先輩後輩の関係性だったりとかってあると思うんだよね。僕は、寮単位で一つの「家族」じゃないけど、そういうものだと思っていて、そういうのは住んで初めて分かるもの。今回、問題だと思ったのはそれを塾事務側が全く理解していないが故に我々にとって悲劇的な方向に行ってしまったと

いうことだと思う。

西村 俺の言いたい事全部言ってくれたね(笑)。

鈴木 乾寮がなくなるっていうのが、和敬の財政的な

問題だからっていうのは分かるんだけど、こういう解決の仕方、伝える時期が遅いっていうこともそうだし、寮生含め全員で解決しようっていうのがなく、塾側が決めたことをお前ら受け入れるみたいな態度がホント気に入らなかつた。で、やっぱりこういう一方的なことになってしまったのは、さっきも言った通り塾事務側が和敬塾とはどういふところなのかっていうのを理解し

てないから起こってしまったんだと思う。前にね、乾文學で佐藤専務にインタビューしたとき、*ミカド*だったけ？早稲田の国際学生寮。あそこに見学行っちゃって話をして、あそこは、寮なんだけどアパートみたいな感じで、隣に住んでる人も知らなければ、和敬みたいな親密な関係性もない。食堂はあっても各自で炊飯器持つてきて、個人で勝手に食べるみたいな、どこか寂しい感じがする。そこでは、ただ住んでるだけで、寮としての良さが十分に発揮されてないんじゃないかみたいなことを言っちゃって、それに対して和敬塾って、適度に上下関係があって、みんな仲が良くって、一生の友ができて、すごくいい環境だと思う、って言うって、そう思ってるんだったらこの決定はないでしょっていう。

西村 そうだよ、そこだよ。一番大きい(問題なのは)。**塾事務がこの合併を最初から全てうまい**

くと思ってたこと自体驚きだし、ありえないことじゃん正直。イメージで、東と西が合併しますって言われて反発が起こるのは分かる。それと同じように乾と北が合併するって話は、絶対反発が出るもんだし、俺は思ってた以上に(乾寮生が)早く静まったなって思ったけど。それをこんな遅い時期に言い出したのも、(塾側の)戦略だったらうまいけど。話し合う時間をなくすって意味で。中途半端に話し合う時間が作られたら、絶対的に反対する理由なんていくらでも作れるから、そうなる(塾側は)終わりだから。圧倒的に短くして、反発が出てそれを抑え込んで、って狙ってたんだったら本当に最低なんだけど、まあ多分そこまで深く考えていないだろうから、単純に、ごめん遅れちゃったあみたいな感覚で言ったんだろうけど。これ、「ごめん遅れちゃった」で済む問題じゃないから。

鈴木 乾だったら受け入れてくれるでしょみたいなね。

西村 絶対あるよね。前話したときにそれはないって  
(塾事務側は)言ってたけど、絶対そんなことな  
いと思う。心のどこかでそう思ってるからこん  
なことできたんでしょ。

鈴木 そうだと思う。

西村 そうでなければ、佐藤専務が、南寮じゃなくて  
乾寮が巽に移動して残るっていう話をそこまで  
否定するとは思えないから。乾なら大丈夫、南な  
らダメだと思ってるからできることじゃんあれ  
って。ひどい。最近巽と南が話し合いをしてて、  
どっちも嫌がってるんだよねやっぱり。巽も結  
構上からきてるみたいだし。

鈴木 上からきてるって？

西村 ここはこうしろ、ここはああしろって上から指  
示してる感じで。まあまあ、それは当たり前かな  
って思うけど。向こうからしたら普通に住んで

たのに急にうるさいやつらが来るわけだから。

南を悪く言うつもりはないけどね。もちろん乾  
もうるさい時はうるさいし。で、南は南で圧迫さ  
れるのを嫌がってるし。

鈴木

だからその、塾事務は理想論しか語ってなくて、  
南が巽行ったら年上の巽生が抑え込んでくれる  
だろうとか、乾が北に行ったら乾の良い文化が  
北で浸透して乾文學も発展するだろうとか。乾  
文學も勝手に北で継続とか書かれてたけどあれ  
にはホント腹立った。誰のための乾文學なのか  
もうわかんなくなつたし。塾事務に良いように  
使われてるようにしか感じなくて。

西村

乾文學のことは編集人以外の人もキレてたよね。  
理想論のことは、そうした理想論がうまくいけ  
ばね、もちろん成功になるわけだけど、失敗した  
ときのことを見えてないっていうか。

鈴木

もちろんそれは、やってみないとわからないっ

てことも多いだろうけどね。ここに住まなきゃ  
ここの良さがわからないように。

西村 前にさ、塾事務の嘉藤さんに心配しすぎだつて  
言われたことがあったけど、心配しすぎなくら  
いじゃなきゃダメな内容じゃない？

鈴木 うーん。

西村 「もし」が起こった時は手遅れだから。とりあえ  
ず合併してみようぜって感じで楽観的にこの問  
題を考えすぎっていうか、良い部分しか考えて  
ないし。考えてるんだらうけど、あまりにメリッ  
トにばかり目を向けすぎてる感じ。デメリット  
のこと考えてるのかなあ。もしこの合併が失敗  
したらとかさ。大変なことが起きる…まあ、あの  
人たちからしたら学生が起こすような大変なこ  
とって大変なことでもないのかな。

鈴木 そういう風に思ってる気はする。

西村 まあ、たかが学生どもが起こすようなことって、

わーわー(文句を)言うだけでほっとけば収まる  
んでしょみたいな。そうだとするとホントムカ  
つくけどな。

鈴木 そうだね。

西村 乾寮にこの時期に言ったのもさ、どうせ最初は  
わーわーうるさいけど体育祭終わったあたりで  
はもうあきらめてるでしょみたいな。実際(乾内  
で)そういう空気もうあるしね。

鈴木 というかなんならさ、乾寮別に何にも言ってこ  
ないでしょ最初からみたいな。

西村 そこまではさすがに思ってたんじゃないな  
い？

鈴木 いやいや、塾事務の対応を見てると乾の反発を  
想定してなかったと思うよ。だって塾事務と寮  
生の話し合いだって野中さんが仲介してくれて  
初めて作られた場だし、野中さんが間に立って  
くれなかったら塾事務側はあの紙切れで通告を

済ませようとしてたでしよ。

西村 まあね。それと寮生が反発しなくなったのも塾側の余りの対応の悪さになってのもあると思う。

乾が異に移るって選択肢はないんですか？って聞いたときに、**4寮体制の時は東西南北で行くんでって。意味が分からない。**

鈴木 その話聞いたときははあ〜？って感じで呆れて何も言えなかった。

### 時間が無いという問題

西村 やっぱり俺たちは理想郷をどっかに持ってなきやいけないと思うよ。

鈴木 理想郷？

西村 理想郷って言い方も変なのかな。どうしたいっていうのを明確に持たないといけないと思うよ。合併するって方向なら今すぐにも合併した後

どうするか話し合わなきやいけないと思うし。

もう時間もないわけだし。色々行事とか学校もあつたりしてすぐ時は経っちゃうだろうし。そもそも会議しましよって言ってすぐ集まるよな寮じゃないからさ、乾って。

鈴木 そうだね。乾なくなるってなって最初の総会で皆集まってちよつと感動したもん。

西村 北も実はもうしようがないってなあって、こういう状況なら。合併するなら今の二、三年生を中心に会議しないといけないし。寮生全員が納得するまでの時間があれば上手くいくとは思うんだけどね。合宿一緒にやろうとしたり、絶対うまくいくとは思うんだけど、そのための時間がなさすぎる。一寮の中で**団体が二つに分かれるってことになりかねない**からね。なつたら最悪だし。それは来年入ってくる一年生にあまりに負担になるし。

鈴木 長い目で見たらさ、塾事務はこいつらがいないく

なってもいいしみたいな。乾という寮がなくな  
って4寮体制にしたいわけだから。全員退寮の  
カードをチラつかせてもそれは抑止力にならな  
いと思うし。悲しいなあ。悲しいよね。

西村 乾全員辞めてくれてもいいんじゃない？ って思

ってるでしょ。乾全員辞めてもマイナスじゃない  
し。

鈴木 乾の建物から人がいなくなればその時点でプラ  
スだし。

西村 もちろん残ってくれた方がプラスだけど。

鈴木 運営人はね、スタッフはクビにはしないって言  
ってるらしいけど。結局大事なのは寮生じゃな  
くてスタッフで、寮生はただの住民としか思っ  
ないように感じてしまった。

西村 住民というか商品だよな。金を吐き出すもの。

馬鹿らしい。

鈴木 しかも起伏の激しい大学生相手に、面倒だろう

ね、向こうからすれば。

西村 なのになんでああいう対応ができるんだろうね。  
鈴木 ありえないよね。

切り捨てられた上田さんそして乾寮

西村 結局上田さん(乾寮長クビにしたからね。最後

まで塾の決定に反抗してくれた上田さんを。形  
としては自主退社の形だけど。塾運営会議で上  
田さん以外乾の消滅を容認したのかって考える  
とホント恐ろしい。まともに考えることできな  
いのかね。

鈴木 上田さんはね、この寮を作り上げたというか、  
乾寮を見守り続けてきたわけだから。それこそ  
この乾文學だっけこういう乾の風土を守ってき  
たわけだから。やっぱり他寮が新歓変わらなか

ったのは寮事務にも原因があると思う。俺も和敬なんて絶対入りたくないって思ってた時に見学に来て、上田さんに乾文學貰って入ったわけだから。上田さんには感謝してもしきれない。逆に言うとう上田さんと会ってなかったらって考えると恐ろしい。今年で最後っていうのは聞いてたけどこんな形でお別れになるなんて俺は塾事務を絶対に許さない。塾事務も上田さんがいなくなってくれてよかっただろうね。俺らも同じ。いなくなってくれた方が幸せなんだよ。邪魔なんだよ。

西村 本当にここだけは許せないと思うのは、上の学年の人たちが新歓革命の名のもと始めた、絶叫廃止、文言廃止を塾側に言われたからってわけじゃないけど率先してやってきて、塾側の言う理想に近づく努力を無駄にされたってこと。

鈴木 いわば模範的なね。

西村 他寮から塾事務の犬って批判されてまで貫き通したのに。

鈴木 乾寮が他の4寮から認められてないって時代もあったみたいだからね。そういう先輩たちの努力の上で俺らがいるのに。

西村 できあ、塾事務はそういう乾寮を使ってきたわけじゃん。俺は道具を使い捨てているようにしか感じない。

鈴木 乾寮はもしかしたら新歓を変えるためだけに生まれたのかもしれないね。

西村 お前らはその役割を果たしたからもういらなくなって捨てられて。

鈴木 金かかるし。

西村 最初出てきた新歓問題は乾で解決したから金銭問題も乾で解決しようぜって。

鈴木 佐藤専務のさ、辞めさせないようにしますっていうのも和敬を分かってない一つだと思った。

普通のアパートとかそれこそ *Miss H* みたいな寮  
だったらわかるんだけど、和敬塾って、塾事務が  
どうこうできない、例えば周りの人との関係だ  
ったりとかがあつて、それでどうにかしますっ  
て、いや、お前じゃできないから、つてすごく言  
いたくなつた。

西村 そうだね。

では塾側はどう対応すべきだったのか

西村 この話が出てきたとき(去年の十月)に、学生に  
話をすべきだったよね。そうすれば、最初は反発  
が出るかもしれないけど、時間をかけて話し合  
いをするのができた。さつきも言ったけど時  
間がなさすぎる。

鈴木 そうだね。合併自体俺は完全否定されるもので  
もないと思う。だけど合併っていう和敬の歴史

で初めて行われる大事件なのにそれを行う準備  
ができていないと思う。

西村 あとさ、佐藤専務が前川塾長にこの件を相談し  
たときに、それを新入生の人数見て考えようっ  
てなつたのもおかしな話じゃない？

鈴木 というのは？

西村 だって建物の老朽化が原因だったら新入生云々  
で建物取り壊すかどうか決めるっていうのはお  
かしいでしょ。新入生関係なく建物取り壊すべ  
きでしょ。

鈴木 確かにね。

平成二十九年八月十九日 於…鈴木部屋

対談後記(平成二十九年九月二十七日筆)

僕と西村の話し合いは深夜遅くまで続いた。ここでは  
愚痴の様な様々な合併批判をしてきたが、僕自身北寮  
との合併に100%反対というわけではない。北寮に行け

ば新たな友達もできるだろうし、そこで更なる楽しい和敬生活を送れるかもしれないという期待もある。僕は、来年から北寮に、つていういきなりすぎる通告、そしてその通告を塾側からではなく寮長にさせるという残酷さ、更にはまず先に連絡すべき保護者への通知が遅れたことに対して憤りを感じたまでである。塾側の

と復興の岐路に立たされている。和敬塾がかつての隆盛を取り戻すためのヒントは、こうしたところにあるのではないかと学生の分際ながら感じていた。

乾

財政難、建物の老朽化など、合併が経営的に合理的なのは分かる。だからこそ、塾側は学生と丁寧に対話を重ね、考えうる様々な問題、学生の不安を取り除いてから正式に決定してほしかった。結局、合併はとりあえず一年延びることになったと聞いた(これも聞いただけで我々寮生は正式な通告を受けてはいない)が、それも学生からの反発を受けてからという後手対応に過ぎない。僕は和敬塾が大好きである。和敬塾が永遠に続いてほしいし、更なる発展を遂げてほしい。この熱い想いがあるからこそ、より魅力的な和敬塾にするために寮生の意見を聞いてほしかった。和敬塾は今衰退

隨筆 乾寮がなくなることの利点

乾寮がなくなるなんて悲しい。なんとも拙い文章を書いているのかと思う。しかし本心をそのまま書けばこうなる。みなそうであろう。乾寮がなくなることを喜ぶ人はわずかだと僕は信じている。金がなかりうと老朽化していようと「乾の新歓」を経験し「乾の山ハイ」を歩破してきた僕にこの話は重過ぎる。来年から「北寮のタカヤです。」と言う姿を思い浮かべるだけでひどく違和感を抱く。ただ、僕はあえて自分が北寮生になつたと仮定してその利点を挙げたいと思う。批判する役はほかの方にお任せしたい。先輩方からお叱りを受けなければ良いが・・・。

北寮生なることの利点は様々だが、僕が最も重視している点は新たな関係が生まれることだ。そもそも、

高谷 健人（乾寮第九期）

周りがどんな人かほとんど知らない状態で入塾した。今では一緒に食事や風呂に行く仲だが、元はといえば赤の他人である。次第に居心地がよくなりサークルや部活とは別のコミュニティとして和系塾（寮）での活動は自分の生活の一部としてすっかりなじんでしまった。前置きが長くなったが僕が言いたいことは、今回の移動を和敬塾内での移動とは捉えずに上京して新たな友達を作るのと同様に、北寮生との出会いが生まれると捉えていこうということである。黙っていても数年後には卒業しなければならぬ以上、この機会には新しい環境に順応していくよい練習になるのではないか。もちろん、乾寮に入りたいと思ってきた方からすればいい迷惑かもしれないが、自分が多少不快に感じる環

境に順応していくという経験は社会人になってから生  
きるのではないか。特に今回は、周りの環境が一変す  
るわけではない。知っているスタッフの方々、先輩方  
がいる中で移動であるから練習としてよい機会にな  
ると思う。

あいさつ回りの際にある先輩が「コンフォータブル  
ゾーンからの脱却」という話をされていた。「乾寮」と  
いうコンフォータブルゾーンから脱却し新たな環境に  
順応していくことは和敬塾が掲げる「実学」という理  
念を体現しているものなのかもしれない。

最後に、もちろん乾寮の文化が失われることは避け  
たいと思っていることは伝えておきたい。ただし、乾  
寮の文化が絶対的に正しいとする論理的でかつ絶対的  
な根拠は存在しないと思う。万が一、現行案（2017  
年7月15日現在）のまま乾寮の閉鎖が行われても北  
寮に対して乾寮の文化を押し付けるようなまねは行  
うべきではない。相手の文化を尊重し互いに調整して新

たな文化を生んでいってほしい。これはまさに「異文  
化理解」の一種であり、僕は海外に行つて現地の人と  
共存することとスケールは違えど似た構図なのだと思  
えている。

いずれにせよ今回の出来事が将来的に良い経験として  
残るのであれば、僕が和敬塾に入ったことで得られた  
最高の学びとなるのは間違いないだろう。

乾

特集  
変革への足音



特集 乾寮の良さ

伊藤 圭基

和敬塾内で乾寮が廃止になるという話が出てから、乾文學として何かできることはないだろうかと、乾坤舎のメンバーで色々と模索しました。その結果、もし乾寮がなくなつたとしても、現在の乾寮の中にある考え方や良い習慣は残していくことができるのではないかという考えにまとまりました。

そのために乾文學としては、乾寮にあるどのような面が寮生にとって良いと思われるのかを寮生全員に聞いた上で、残していくべき乾寮の良さについて議論し、それを明文化しておくことで、今後の乾寮にとっても和敬塾にとってもプラスになるように働きかけをしていきたいと思いました。そこで私たちは寮生が

集うラウンジの前に張り紙をし、そこに思い思いの乾寮の良さを綴ってもらうことにしました。その写真1です。

この張り紙に書き込まれた言葉を見てまず気づいたことは、多くの寮生は、乾寮という枠組みについてのコメントよりも、「優しい先輩」や「家族のような関係」と言った、乾寮の中にいる人々についてのコメントが多いということです。

この企画をしたとき、私たちがここに書かれる言葉に期待したのは、乾寮という枠組みにしかないような特殊性を発見することでした。しかし、寮生が気に入っているのは、乾寮の中にある具体的な何かというよりも、乾寮に集う人々や、その人たちが作り出す空気感なのかもしれないということが伺えます。

確かに、自分が気に入った人々がいる集団に自分も所属したいと思うのは当然でしょう。しかし、乾寮の良さを残していくことを考えた時には、もう少し

し別の要素を抽出していかなければなりません。具体的には、なぜ乾寮には、このようにお互いに相性のいい仲間が集うのかについて考えてみたいと思います。

もう少し細かく張り紙を見ていくと、「自由」や「ゆるい」という言葉が目につきます。確かに和敬塾の中で乾寮は最も拘束力が無いと言われており、それが気に入っている人たちが乾寮生の中に多いようです。では、これが乾寮の特殊性と言えるのでしょうか。

しかしよく考えてみると、この拘束力の低さは、和敬塾内の他の寮と比べた時に気づくものであって、大学が経営しているような寮や、一人暮らしなどと比べれば、よっぽど拘束力が多いはずだということがわかります。それなのにもかかわらず、「自由」や「ゆるい」といったコメントが書かれ、それが乾寮の良さだと思われるのはなぜでしょうか。

それはおそらく、求める自由度の差なのではないで

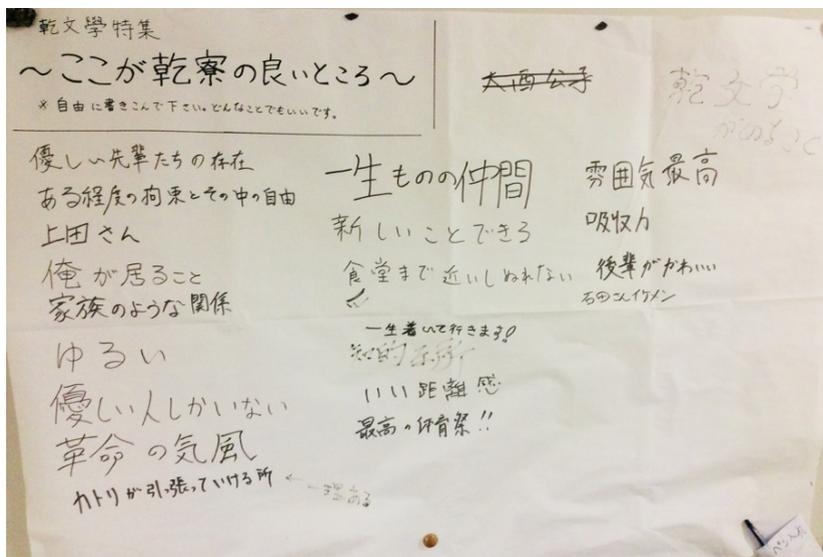


写真1 実際に設置した張り紙

しようか。一人暮らしをすると、確かに寮生活よりよ  
つほど「自由」ですが、そこには色々な負荷がかかりま  
す。食事を例にとると、何をいつ食べるかを自分で決  
められるとはいえ、その分金銭的な面や、栄養面での  
バランスを取ることが難しくなります。一方、和敬塾  
では、献立や食事の時間は決まっていますが、その  
分、一人暮らしではなかなかいただけられないような食  
事を食べることができます。もし、献立や食事の時間  
を制限されることに不便を感じることも、それに  
よって得られる利点が大きいのであれば、寮生にとつ  
てそれは自由の制限とは感じないのだと思われます。

同様に、行事への参加も同じことが言えるでしょう。  
和敬塾では、いくつかの行事に参加されることが求め  
られますが、その行事へ参加しなければならぬとい  
う自由の制限と、そこで得られる楽しみを比較した時  
に、後者の方が大きければ、行事に参加するというこ  
とは、自由の制限ではなくなるはず。特に乾寮で

は、行事への参加は義務化されていません。そのため、  
特に寮としての強制感を感じずに生活できるのでしよ  
う。

つまり、「自由」という言葉は、主観的なものである  
ため、和敬塾という客観的に見ると制約の多い寮の中  
で、乾寮生が「自由」を感じているということは、寮生  
活の中に制約を上回る利点を見出しているということ  
だと僕は思います。

また、この「自由」という言葉は、この乾文學の前号  
の特集でとりあげた内容とも繋がるのではないでしょ  
うか。

前号で塾事務の方にインタビューをしたところ、共  
同生活における人間形成というのは、行事の中にある  
わけではなく、普段の生活にあるということをおっし  
やられ、また、大学生という自由な立場を利用して広  
い視野を持ち、各々が自由に能力を高めていくことが

必要であるとおっしゃられました。

乾寮は、行事への参加を義務付けることなく、寮生の交流の場の一つとして捉えており、普段は個々の生活スタイルに合わせて十人十色の生活をしているけれども、寮生の仲はよく、集まるときは集まると言った、共同生活としての振る舞いもできているように思われます。

このことを考えると、乾寮は塾事務の考えを一番に実践している寮だと言えるのではないでしょうか。ならば、乾寮がなくなってしまうから、このような乾寮のあり方は推奨されるべきだと思いますし、乾寮にある空気感を他寮にももっと広めていけるよう、努力すべきだと思います。

ただ、他の寮生からみて、乾寮の雰囲気がどのように見えているかはわかりません。各寮それぞれ良さがあり、自分の寮に誇りも持っていますから、他寮に対

して乾寮の優位性を主張することは間違っているでしょう。実際、和敬塾一番の行事である体育祭では、乾寮は毎年負けているので、自由な寮風と引き換えに、団結力に関しては他寮に劣っていると言えるでしょう。各寮それぞれの長所があるなか、乾寮としてどこを譲ってどこを譲らず貫いていくのか。今後、乾寮が廃止され、他寮との合併をする際は、十分議論を重ねる必要があることだと僕は思います。

例えばこの乾文學もその議題の一つではないでしょうか。乾文學は「自由」な雰囲気を持つ乾寮だからこそ生み出したものだと思っています。文學が好きな人たちが集まり、このような取り組みを始めることができたのは、そのような取り組みを受け入れ、支援していく形で関わってくれようとする乾寮生のおかげでもあったはずです。この取り組みが、他寮の中でどのようにして受け入れられ、受け継がれていくのか。これについても、多くの話し合いが必要になるでしょう。

今後、乾寮の自由な雰囲気、和敬塾全体にいい影響を及ぼし、それによって、この乾文學のような、これまでの和敬塾になかったような取り組みが次々と生まれ、和敬塾を活発にしていけることができれば、寮生にとっても和敬塾にとってもプラスになるでしょう。もしそうならば、乾寮が解散する意味もあったと言えるでしょうし、張り紙にも書かれていたように乾寮の「革命の気風」が和敬塾全体に広まったことにもなるでしょう。

乾



写真2 乾寮と乾文學

## 転句

野中 高亮

「乾寮の移転・統廃合の問題は良くも悪くも、「乾寮」という場所や寮風またはその価値など、多くのことを改めて考えさせるきっかけとなった。乾寮の考え方や良い習慣といったものを抽出して今後も残していこうと試みる今号の特集内容も、その動きの一つである。規模感は違えど、これは、人工知能の登場と発展によって、自分たちの仕事が代替されるという危機感に煽られた人類が、「人間の価値」や「人間存在の意義」などを再考する構図に似ている。こうした問題に直面すると、必ず悲観論やネガティブな考えは出てくる。人工知能と人間の問題においては、「仕事を人工知能やロボットに代替され職を失った労働者らの生活は困窮し

暴動が起こる」といった言説や、極端な例を挙げれば「人工知能が人類を滅ぼす」という人もいる。今回の乾寮の問題にしても、寮の移転・統廃合に伴い、これまでの「乾寮」の文化や良さが全くなくなってしまい、それでは和敬塾で生活することはできないと考えて寮を辞めてしまう人や、他寮とは明らかに異なる寮風をもつ乾寮の廃止によって和敬塾の多様性が大きく損なわれると考える人がいる。これらの考えの是非を問うつもりはないが、こうした考えがあることは確かである。ただこうした悲観的な考えを巡らせるばかりで、目前に確実に存在する問題に対して思考停止状態に陥っていないかが懸念される。「人工知能が仕事を奪う」と声をあげたり、考えたりしても、世界の現状や趨勢を見ればわかるように、人工知能の開発や発展は止まらないだろう。同じように、和敬塾の塾生の減少や財務などの現状を見れば、経営のスリム化に伴う寮の統廃合は不可避であり、いくら悲観論やネガティブな考え

をしようとも問題は進行するのである。

では、進行する問題に対して当事者である私たち寮生はいかに立ち向かえばいいのだろうか。この特集はその一つの実践であると私は考える。本文にもあるように、今回の特集で目指したことは、今の乾寮にある考え方や良き習慣というものを明文化し、「乾寮」という枠組み、名目的なものが無くなったとしても、乾寮の寮風とでもいうべきものを残していくことである。ただ、この明文化というものは大変に難しい、もしかしたら本質的には不可能な試みだったかもしれない。というのも、前号(三月特別号)の特集で、和敬塾の常務理事でいらっしゃる栃木さんとのインタビュにおいて、栃木さんは「伝統とは文章に残るものではなく、文章とかで語ろうとしても伝えられないが、たしかにそこに残っているものが伝統である。たとえ語り得なくとも、何か残っているものがあり、人はそれを感じ

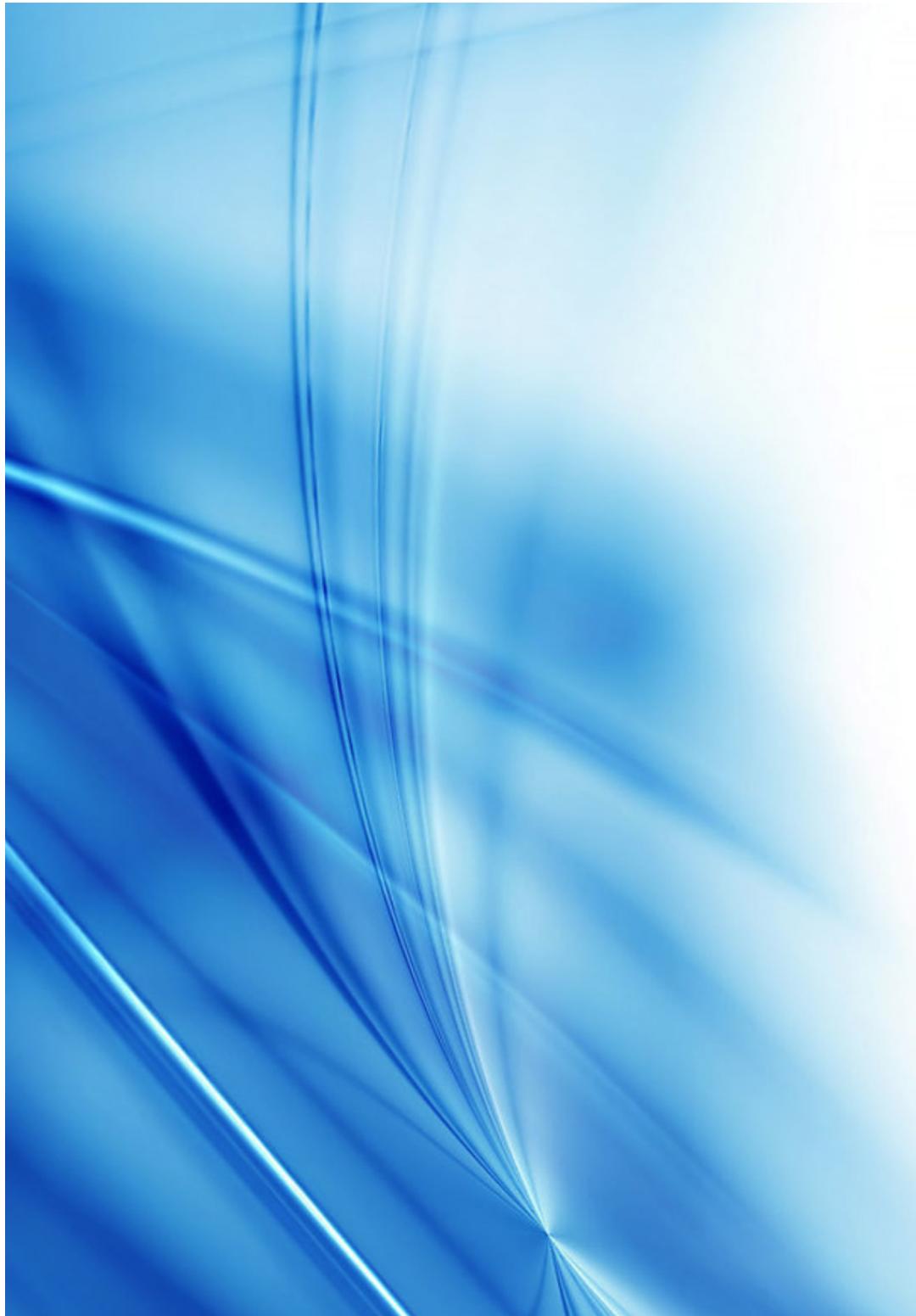
ることができる。それこそが伝統であり風土であり、寮風である」とおっしゃっていた。この言葉通りとするならば、そもそも私たち乾文学が今特集でしようとしたことは、絵に描いた餅を食べようとしたようなものかもしれない。しかし、こうしたことを試みることに自体に意味があるはずだ。たとえ明文化するという当初目指したことが達せられなかったとしても、その過程で私達は、たしかに「乾寮」の考え方やその良き習慣について考えた。文章化することはできなくても、それについて真剣に考えること、それ自体に意味があり大事なことなのである。

起承転結。この構成の文章や物語(ストーリー)は多い。和敬塾の歴史の中で乾寮が創設されてからの年月は決して長くはないが、乾寮の物語はたしかに存在し、それも現在進行中である。そんな乾寮物語に起承転結を当てはめると、以下のようになるかもしれない。乾

寮が創設されて初めの一・二年は起句であり、物語の冒頭である。寮内に一年生と二年生しかいない乾寮は他寮の模倣をしながらも、独自の文化・習慣を築きながら寮を形成していく。創設されて三年から去年あたりまでが承句であろう。一年生から四年生まで全学年が揃い、他寮と比べてもやや人数は少ないものの「乾寮」が確立され、文化祭や体育祭などの行事だけでなく、日常生活においても「乾の寮風」というものが感じられるようになり、それらは後輩へと受け継がれるようになる。そして今年、つまり現在は転句にあたる。実際の小説や映画でも、承句で一旦落ち着いた物語は、転句で事件やハプニングが起きて一転する。乾寮にとっては、寮の移転・統廃合の件が転句の引き金であることは言うまでもない。今まさに、この問題について話し合ったり考えたりしているわけであるが、物語は現在進行中であるため、結末がどうなるかは誰にもわからない。転句というのは、その物語を読んだり見た

りする者もそうだが、物語の中の人物たちもドキドキハラハラし、落ち着きがない。乾寮でも、寮生が各々で考えることや意見が異なり、様々な葛藤や憤りがある。問題の真っ只中で、あれでもない、これでもないといった状態である。しかし、「物語の良し悪しはその結末で決まる」のである。転句にあるこの時期に、「乾寮」について話し合い、乾寮として残すべきものを考え、結句を迎えたい。乾寮物語、最後に読み通した時、良い結末、良い物語と言われるように、今が大事な時期である。

乾



	中休み (20分)	昼休み (40分)	放課後 (1.5時間)
月曜日	3	32	30
火曜日	9	66	37
水曜日	2	30	45
木曜日	3	40	16
金曜日	1	24	40

野中 高亮(乾寮第七期)

以下の問題を真剣に考えてみてほしい。

上の表は、ある週の学校の図書館の利用者数(人)をまとめたものです。

この表について、あとの問いに答えなさい。

問…火曜日について、昭子さんは中休みの方が放課後より混んでいると考えましたが、和子さんはそうとは言い切れないと考えました。あなたはどちらの考えに賛成ですか。その理由も答えなさい。

この問題、用があつて渋谷から横浜へ行く際に乗った東急東横線の電車内の広告にあつたものだ。乗った電車が各駅停車だったので、横浜に着くまでの時間は

およそ四十五分間。渋谷駅で乗車してすぐに広告を見つけたので、この問題とは四十五分ほどお付き合いさせてもらった。

昭子さんは頭がおかしいのか。私がこの問題を一読して抱いた正直な感想である。表の数字を見ればわかるように、火曜日の中休みの利用者数は九人、片や放課後は三十七人である。この二つの数字だけを見れば、数字の大小を比べることができる者は皆、放課後の方が混んでいると言うだろう。注意力に乏しい私は、表全体を詳細に見ることなく、あまりにも安易な比較をもとに、昭子さんを貶めるような感想を抱いてしまった。もちろん、私の頭も先ほどの比較だけで満足するような造りになっていくわけではない。問題文を詳細に読み込み、各曜日・各時間の利用者数を記した表を今度は細部までしっかり見る。どうやらこの問題の肝は、中休みと放課後で利用時間の長さが異なるという

ことであるらしい。中休みの時間が二十分なのか、利用者数の計測をしていた時間が二十分なのかはわからないが、とにかく放課後の九十分とは時間の条件に随分と差がある。このことに気づけば、なるほど、昭子さんは「一分あたりの利用者数」を比較して、問題文にあるような考えに至ったのかもしれない。つまり、中休みの一分あたりの利用者数は九人を二十分で割って  $0 \cdot 45$  人毎分となり、同様にして放課後は  $0 \cdot 41$  人毎分となるため、中休みの方が混んでいると考えたのかもしれない。問題文に昭子さんの思考過程が記されているわけではないので、昭子さんが本当にこのように考えたとは断定することはできない。もしかしたら別の考え方をしたかもしれないが、筋の通る説明として「一分あたりの利用者数」を比較したというのは納得のいくものであり、昭子さんの考えは頷けるものになった。ところが、和子さんは昭子さんの考えに賛同しない。しかも、明確に反対を示したり、昭子さんの間違

いを指摘したりするわけでもなく、昭子さんの考えを断定することはできないと考えているのである。ここでも和子さんの思考過程が記述されているわけではないので、和子さんの頭の中を想像しながら、断定できない理由を探して考え、その上で両者の考えを総合的に評価して、二人の内どちらかに理由付きで賛成しなければならぬ。

以下、電車内や自宅に帰った後の思考をまとめた問いに答える形の文章を記述する。そのため、問題についてまだ考えたいという人は続きを読むことをおすすめしない。

結論から先に言うと、私は和子さんの考えに賛成である。

問題の設定や条件を把握した上で、この問題について考える際、まず私は「混んでいる（混む）」という状況を想像した。どのような状態であれば、図書館が混

んでいると言えるだろうか。図書館という空間全体に、ある一定の人数密度を超える人が存在すれば「混んでいる」と言えるのか、それとも貸出カウンターに人を列を成していれば、図書館の一部分である「そこ」だけをみて「混む」と言っているのだろうか。現実世界での自分の行動を省みて考えてみると、図書館の利用方法には大きく分けて二つあると思う。一つは、ある特定の本を借りて図書館に行き目的の本を借りて、わりかし短時間で帰る場合。もう一つは、図書館で本を読んだり勉強したりして、長時間図書館を利用する場合の二種類である。前者の場合、「混む」という状況で問題になるのは、貸出カウンターでの列の長さであり、後者ならば、貸出カウンターの列の長さは関係なく、図書館内の人数密度が問題になる。そうすると、一分あたりの利用者数は意味をなすのは、列の長さを混雑の指標とする場合であり、図書館内の人数密度を問題とするならば、時間あたりの利用者数は意味をなさず、

計測している期間内での図書館にいる人数の最大値が混雑の指標になるはずである。現実的に考えれば、本を借りに来るだけの利用者も、本を読んだり勉強したりする利用者もどちらもいる。そのため、単純に時間あたりの利用者の数を比較して、どちらか一方が「混んでいる」と断定することはできない。

また、表の数字からだけでは読み取れない情報があることに注意しなければならない。例えば、火曜日の放課後、九十分の間に三十七人の利用者がいたこと表から読み取れるわけだが、極端なことを言えば、初めの五分間の内に三十七人の利用者がいた可能性もあり得るし、三十七人が時間的に等間隔で図書館を利用したかもしれない。この場合、同じ九十分の間に三十七人の利用者というのでも、混雑の状況がまるで違うことが容易に想像できる。もちろん、明確な情報がない以上は表の数字に勝手な状況を当てはめてはいけない。しかしこれは言い換えれば、表の数字に、その数字以

上のことを語らせることには限界があるということである。確かに、表から「一分あたりの利用者の数は放課後よりも中休みの方が大きい」と言うことはできる。しかし、その数字の比較から中休みの方が「混んでいる」と断定することはできない。数字の比較と混雑の比較は別次元なのである。

昭子さんの考えが間違っているとはいえない。ただ、混雑という状況の曖昧さや、表から読み取れる数字の限界から、昭子さんの考えに確証があるとはいえないのである。これらの理由から私は和子さんの考えに賛成せざるを得ない。

さて、実はこの問題は中学校の入試問題の一問として出題されたものである。科目は算数である。つまり、小学校の年生が、算数の問題しかも何問かあるうちの一回問として、この問題に挑むのである。中学校に入る前の当時の私が、この問題と対面したら、和子さんの考

えが全く理解できなかったであろう。算数の問題であるから、とりあえず四則演算をして意味がありそうな数字を探して、その結果、時間あたりの利用者数の比較という安直な答えにたどり着き、和子さんの考えは無視していただろう。おそらく算数の問題はこれだけではないので、この問題だけに多大な時間を割くことはできないため、悠長に混んでいるとはどのような状況なのかを考える時間的な余裕はなかったであろうし、そもそも小学生の私がそんなことに考えを巡らせられていたとはとても思えない。小学生の能力をやや過小評価した発言になるかもしれないが、この問題は入試問題として小学生に出題するには惜しい問題である。十分な時間をとった上で、高校生・大学生以上の人に思考力を試す問題として出題するに耐えるものであると思う。実際私は、電車の中でかなり頭を使って考えた上に、自宅に帰ってから考えたほどであった。

この問題の面白いところに、出題科目というフレー

ムを替えることで解答者の答えが変化する可能性がある。この問題は本来、算数の問題として出題された。算数の問題であれば、まずは何かしらの計算をすることが頭に浮かぶ。むしろ算数の問題として出題されて計算がなかったら不安になりそうである。しかし、もしこの問題が国語の問題として出題されたらどうだろうか。「昼休みに六十六人も利用者がいる図書館が、中休みのたったの九人の利用者で混んでいるという昭子さんは頭がおかしいので、和子さんに賛成」のような、計算をまったく利用しない解答も考えられそうである。また、計算に主眼が置かれない代わりに、言葉の意味をもっと深く考える。例えば、私の解答にもあるように、「混む」という状態の定義を考えるようになるかもしれない。また小学生の試験問題の範疇を超えるが、例えば件の表が、図書館の混雑解消という課題解決のための調査結果の一つとして提示され、昭子さんと和子さんの考えを聞く場合であったら、数字だけでなく

具体的な場面を想像して、表だけでは情報が足りないことに気づくはずだ。

この問題は電車内で広告としてあった。広告である以上、問題だけでなく広告主の情報と広告主が伝えたことが書かれている。

プレゼン力。

算数だけど記述式で、正解がいくつもある問題。問われるのは、自分の考えの根拠をしっかりと示し、相手が納得できるように筋道を立てて表現するチカラ。世の中の的に言うところ「プレゼンテーション力」。そんなチカラを一緒に育てていこう——入試問題から私学（私立中高一貫校）の子供たちに寄せる想いが見えてきます。

確かにこの問題に決まった正解はない（もちろん入試問題であるため、出題者側がある程度想定している

正解はあると思うが）。しかし問われているのは、正解までの思考過程とそれを論理的に表現するチカラ、プレゼンテーション力であるという。先に私の解答ともいべきものを書いたが、私のプレゼン力はいかがであっただろうか。

思考力に優れ問題の意図を正確に見抜いたとしても、それを表現する能力がなければ、この問題においては、高い評価を得る解答をつくるのは難しい。思考力と表現力の両方が必要になるわけだが、これはこの問題に限った話ではなく、現実の多くの問題はこのどちらの力も必要になる。頭の中でどれほど素晴らしいアイデアや解決策があったとしても、それを相手に伝えることができなければ、そしてただ伝えるだけでなく、納得のいく形で伝えることができないならない。

日常生活の中で、思考力や表現力を意識することはあまり多くないと思う。少なくとも私はそうである。ときおり乾文学などで文章を書くことで表現力を高め

る練習をしているが、日常化されているかと問われれば、素直に領けない。思考力に関しても同様である。そもそも「思考力や表現力を意識する・しない」ということを意識していなかったかもしれない。そういった意味で、電車内で偶然に見つけた広告の問題であったが、それを意識するきっかけを与えてくれた良問に出会えたと思う。

## 乾

論考  
機械学習の可能性と限界

齊藤 和輝（乾寮第八期）

昨今、色々なネットニュースやTVなどで騒がれている人工知能。今になってその存在が大きく取り上げられているがその歴史は古い。一九九〇年代後半になると研究は一気に進み、ディープラーニングの開発で注目を集めている。歴史についてはあまり言及しないことにする。それはあまり重要ではないからである。人工知能と機械学習は厳密には違いがある。それは目的と手段である。多くの記事がそれを誤解している。人工知能の本と機械学習の本では書いてある内容が違う。前者ではこれから人工知能がもたらすことであるとか、人類にとって脅威となりうるなどというように書かれているが、自分としてはあまり現実味がないように思われる。なぜなら人工知能であるにしろ、機械学習で

あるにしろ数学の論理形式で表現しているからである。そして数学の論理形式で記述できるものには限界がある。それはゲーデルの不完全性定理によって証明されている。ゲーデルの不完全性定理を簡単に説明すると、理論で説明できるものは無矛盾であるということであり、数学においては非常に重要である。しかしながら副産物としてこの世には理論では証明不可能なものが存在することも論理的に示されてしまった。それが数学の限界である。例えば、美しい絵画を見るとする。自分はその美しさを美しいと思うが、論理的になぜそれが美しいと思えるのかは証明ができない。

このように数学の論理体系には限界があり、その論理体系に従っているコンピュータや機械学習にも限界は

ある。もちろん、機械学習は今後非常に役にたつだろう。それに対しては同意できる。しかしながら、それだけである。便利にはなるが人類の脅威にはなりえないだろう。確かにこれから人間に代わって人工知能が仕事をする分野は広がっていくだろうが、人間が仕事をする分野は他に移るだけだろう。それは歴史からもわかる。昔は電話の交換手という仕事があったが今ではコンピュータが制御してくれている。そこで働く人間は居なくなったがそれで困窮する人間は居ない。機械が得意なものは機械に任せればいい。

人工知能にも得手不得手がある。論理的なデータの処理は人間以上の正確さと速さを持つが、論理で証明できないものに対しては手も足も出ない。真似事はできるが所詮はただの真似である。

色々と連ねてきたが自分が言いたいのはただ一つである。みんな機械学習を過大評価してないかということだ。機械学習によって人類が脅かされるのだ、支配

されるのだ。ぶっちゃけていえば、革命的なことが起きない限り、そんなB級SFみたいな展開にはならないだろう。そんな記事を書いているのは大抵が文系の人間で数学なんて文字を見ただけで逃げた人たちだろう。発言力があるだけであたかもそれが真実であるようにいうのはあまりに滑稽だ。

自分はまだ文章を書くのが得意ではないがなんとなくでも機械学習の認識に対する警鐘とでもいうべきものを感じ取ってくれたらうれしい。

乾

## 寄稿者一覧

伊勢康平（いせこうへい）…六期、早稲田大学文学部中国語中国文学コース。

鈴木啓介（すずきけいすけ）…八期、早稲田大学教育学部英語英文学科。

伊藤圭基（いとうよしき）…七期、東京大学理学部物理学科。

西村康成（にしむらこうせい）…八期、早稲田大学教育学部数学科。

野中高亮（のなかたかあき）…七期、学習院経済学部経済学科。

高谷健人（たかやけんと）…九期、早稲田大学社会科学部。

齊藤和輝（さいとうかずき）…八期、東京理科大学理学部数学科。

## 編集後記

夏ごろに突然伝えられた乾寮廃止の話は、寮生にとってまさに「寝耳に水」であり、しかし同時に寮生それぞれが乾寮のことをどう考えていたのかを周知するに至った。

今回僕たち一年生が初めて乾文學の編集に携わるにあたり、この問題をテーマにできたことは大変幸運なことであつたと思う。なぜなら、乾文學のテーマを自分自身の問題として真摯に取り組めたからだ。この経験は今後乾文學が発展していく中で必ずやいかされるだろう。読者の皆様が必ずしも乾寮と直接関係があるとは限らないが、今号を機にますます、進化を遂げる乾文學に今後ともご期待願いたい。僕も編集者である前に一人の読者として、乾文學の発展を願ってやまない。

高谷 健人（乾寮第九期）

